(6) 藤原中学校々歌の由来

戦後学制が改められて六・三制が布かれ、新制中学校が各村に出来たが、昭和二十二年東藤原村を除いた西部四ケ村の中学校を統合して組合立の協和中学校が発足、初代校長として字本郷出身の並河昇氏が着任した。校風の刷新をはかるためとて、新校歌を作ることになり、歌詞は本郷に隠退の氏の兄近藤杢をわずらわせた。日本漢詩界の第一人者としてきこえる大学者である翁は、たちどころに漢詩によって校歌をつくったという挿話がある。

●題協和中学校壁　　作詩　近藤　杢

仰看藤岳聳蒼旻　　あうきみる、藤岳そうびんにそびえ
千古員川碧疊鱗　　せんこいんせん、へきじょうりん
享得山河霊秀気　　うけえたり、さんかれいしゅのき
神高情潔健軀伸。　　しんこうじょうけつ、けんくのぶ

○　　○

人文郁々協和園　　じんもんいくいく、きょうわのその
聯手切磋倶養魂　　れんしゅせっさ、ともにようこん
欲築国基長鞏固　　きずかんとほっす、こっきとこしえにきょうこ
雄心磊落壓乾坤　　ゆうしんらいらく、けんこんをあっす

○　　○

要汲濊々文化泉　　くむをようす、せんせん、文化のいづみ
致平有道叩鐘然　　ちへい道ありて、鐘ぜんとたたく
耐寒凌暑何摧折　　たいかんじょくしょ、なんぞざせつ
努力期他使命全　　努力し、他をきす、しめいまったし

○　　○

この詩を国訳したのが協和中学校の校歌であり、昭和三十五年四月東藤原区生徒（旧大和中学校現北勢中学校）を含めて藤原中学校が設立されたので、杢氏によって一部修正され、今に至っている。

一、仰ぎ見る　藤原の峰　　員弁川流れ絶えせず
　山川の秀真の里ぞ　すこやかに　清く気高く　伸びゆかん　教えの庭に

二、名もゆかし　協和のそのに　　手を連ね　力合せて
　ゆるぎなく永久に安けく　国の基　築き固めん　われ等皆　雄心高し

三、汲めや汲め　文化の泉　　うちならせ　平和の鐘
　霜に耐え暑さにめげず　身に負える　重き使命を　魂こめて　いざ果しなん

○　　○

さて作曲ということになって、当時日本の長者十傑に名を連ねた字本郷出身のエンプレス社長（東京在住）岡本柳太郎氏をわずらわすことになり、氏の厚意によって日本作曲界の長老山田耕作先生の作曲が出来、昭和二十六年に校歌となったもので、校歌披露にグランドピアノ一基も氏から寄贈された。

藤原中学校になって校歌の第二節「名もゆかし協和の園に」が「睦まじく、この学び舎に」と杢氏によって改められ、新装成った藤原中学校の玄関ロビーに氏自ら揮毫し、軸として今に後輩を激励している。昭和三十六年屋内運動場（体育館）が完成、ステージの緞帳にも校歌が刺繍されたものを同窓会によって寄贈、郷土の漢詩人の名作を伝えている。氏は郷土藤原の山と員弁川の美しさを歌に取り入れ「秀真」の里と呼んでいる。

いつまでもこの秀真の里の生んだ数々の風物や文芸を大切にしていきたいものであることを念じてやまないものである。

三重県藤原中学校

『藤原史話』（著者：近藤　實　昭和 52 年）
第一輯　あゆみ　　第二輯　風物 P140~142